

春は新しい生活の始まるシーズンと言うことで、今年も町のあちらこちらで引っ越しする姿が見られたことと思われる。

江戸時代、陸上で物資を運搬するには多く馬が用いられていた。もちろん車もないわけではなかったが、当時の資料を見ると馬でのこれには様々な理由が考え

られる。街道の整備があまり進んでおらず、特に山間部を通る道では車を通すにはあまりに狭く、険しい道であったり、平野部でも雨が続きと深いぬかるみとが続きと深いぬかるみとなつて車輪を取られる場所が存在したという事情も大きな理由の一つであろう。そういう事情に加えて本県では、さらに冬期間深い雪に閉ざされるといった状

況もあり、車より馬の背の方が確実な輸送力として活躍できたのではないだろうか。

とくに南部地方では米などの量を表すとき、津軽地方などのように「米何石何斗何升」という数え方のほか、「米何駄何斗何升」という数え方がされていたことが「八戸藩日記」などに頻繁に見えている。この「一駄」とは、一匹の馬が

う量になる。だが、「八戸藩日記」によると、八戸藩では七斗五升を一駄として扱っていた。この場合の「片馬」すなわち一俵は三斗七升五合となるが、馬の背に積む場合の俵は、普通の米俵より若干小さい俵が想定されていたようである。

さて、今も昔も物の運送を頼むと代金がかかるわけだが、陸上で馬の背に物資を乗せて運搬した際の運賃、すなわち「駄賃」の額を当時の資料から探してみたい。

## 馬の背に揺れる米俵

石塚雄士

(県民生活文化課史編さんグループ)

搬送できる単位であり、米などの穀物であれば俵二つを馬の背の両側に下げた姿で、一俵だけに乗せたような場合には馬の背の片方だけに乗る量として「片馬」と数えられた。

この「一駄」がどの程度の量になるのかというと、当時の米俵は四斗から四斗五升入りだったので、それが二俵分であれば単純に計算すると八斗から九斗とい

江戸時代の中頃、元禄年間の弘前藩に二十四文というのが公定値段として定められており、冬期間はこの3割増となっている。また、弘前と青森の間は鶴ヶ坂経由で十一里三十四丁余、大豆坂経由だと十二里一丁余だったが、この間は一駄三百六十文とされている。ちなみに、人が運搬した場合には、五貫

の文書では、重さ三十六貫目(約135kg)を一駄として、一里(約4km)ごとに二十四文というのが公定値段として定められており、冬期間はこの3割増となっている。また、弘前と青森の間は鶴ヶ坂経由で十一里三十四丁余、大豆坂経由だと十二里一丁余だったが、この間は一駄三百六十文とされている。ちなみに、人が運搬した場合には、五貫

目から六貫目を単位として一里十二文となっていた。この値段が定められた当時、弘前藩では金一両で米を約一石五斗買えたと資料に見えていることから、単純に計算すると、二十四文では米が約九合(約1.4kg)買えることになる。もちろん当時と現代とは単純に比較できないが、だいたいこれがどのくらいの価値のお金にあたるか想像していただけるだろうか。

現代、たとえ小さいトラックであったとしても、当時の十駄分以上の重さの荷物を運転手ただ一人で運搬できることを思うと、いかに運送にかかるコストが安くなったかが分かる。

※石塚氏は、平成19年4月1日付で、環境生活部青少年・男女共同参画課に異動したが、引き続き県史編さんグループと協力して執筆にあたってもらっている。



馬で荷物を運ぶ

(大日本国東山道陸奥州駅路図より・青森県立図書館蔵)